

平成 28 年度 国立大学法人岩手大学 大学院修了式 式辞

本日、多数のご来賓の皆様、保護者の皆様のご臨席の下、平成 28 年度岩手大学大学院の修了式を挙行できますことは、本学にとりまして大きな喜びであります。

修士、博士の学位を授与された修了生の皆さん、おめでとうございます。本年度は、修士・博士合わせて 332 名の優れた人材を、社会に送り出すことができました。

修了生の皆さんの脳裏には、教職員や友人たちと共に過ごした日々の生活、研究の進展、将来への夢と不安など、様々な思い出が行き来していることでしょう。私の経験からも、修士論文あるいは博士論文を書いたときに人生で最も集中した時間ではなかったかと思います。

また 30 名の外国人留学生の皆さん、12 名の社会人学生の皆さんの努力は、他の一般学生の模範となり、特筆すべきものであります。皆さんのこれまでの真摯な努力を讃え、教職員共々喜びたいと思います。

そして修了生のこれまでの学業を温かく見守ってこられた御家族の皆様には、その喜びもひとしおかとお察しいたします。長年の御労苦に対し心から敬意を表し、お祝いを申し上げます。

さらに連合農学大学院を構成し、本日も学長先生をはじめ各位に御臨席を賜っている帯広畜産大学、弘前大学、山形大学、及び、本学各研究科の教職員の皆様、ご支援を頂いた地域の皆様にも厚く御礼を申し上げます。

さて、修士論文あるいは博士論文をまとめられたことで、皆さんはそれぞれ修士号、博士号の学位を取得され、これからは各分野の専門家として研究者なり、技術者、高度専門職業人として新たな出発をするわけであり、毎日の精進がこれからも求められます。皆さんに期待されるのは地域を、日本を、あるいは世界をリードするリーダーになることです。

現在日本は、地方創生のために「イノベーション」を起こすことが大きな目標となっています。内閣府の総合科学技術・イノベーション会議では「第 5 期科学技術基本計画」を立て、Society5.0 と名付けた超スマート社会の実現を提案しております。そこでのキーワードは、AI、IoT、Big Data などです。直接これらと関わる人もいるでしょうが、多くの人は好むと好まざるとに関わらずこれらと関わる人生を送ることになります。AI の発達により 30 年後には現在の職種の 70% が不要になるともいわれております。残念ながら、皆さんがこれまで研鑽された専門性が必ずしも活かされなくなることが十分に予想されます。そこで重要なことは、自分の専門性に固執せず、その専門性をコアとして、変化する環境に合わせて領域を広げて行くことだと考えます。それは「挑戦」です。

大学教育の大きな目標は問題解決能力を伸ばすことでもあります。皆さんは論文作成においてこの能力を磨いたはずですが、これからの実社会での仕事では何が問題かを抽出することは結構難しいものですし、解決のための方法を考え、実行することはさらに難しくなります。数年

後には皆さんがリーダーとなり、まさに企画力が問われます。仕上げた論文の結果よりもそのプロセスこそが、これからの皆さんにとってはより貴重な財産になると思います。端的に言えば、これまでの研究テーマは単なる練習問題に過ぎないとも言えます。特に若い研究者を目指す人にとってはこれからの本番です。

もう一つの論点は、システムを組み上げる力です。「ものづくり日本」という掛け声の中で日本人は技を磨いてきました。部品単品では世界一です。しかし、機械のみならず社会組織はシステムとして動きますが、日本人にとって様々な要素を組み上げ、目的の機能を満たすための能力は決して優れているとは思いません。例を挙げれば、確かに探査衛星「はやぶさ」は7年の旅から奇跡的ともいえる中で帰還しました。素晴らしいことです。一方で、福島原発は言うに及ばずですが、日本の技術者の粋を集め、国産の小型旅客機 MRJ の開発では、残念ながら試作、あるいは試運転で不具合がその都度見つかり、そのたびに当初計画から何年も遅れています。つまり航空機という大きなシステムを作り上げる技術が未だ十分ではないといえます。経営にしろ、技術開発にしろ、あるいは教育にしろ、社会の各分野でのリーダーとして期待される皆さんにとって、多くの要素を組み合わせる機能的な大きなシステムを作っていくことが求められます。簡単にできるものとは思いませんが、先に述べた狭い専門性に固執することなく広く俯瞰することが先ずは必要と考えます。

最後になりますが、東日本大震災に触れて終わりにしたいと思います。丁度6年が経過し、復興過程も平均的には80%まで進んできたと言われております。本日の修士課程修了者の多くは丁度大学入学時に震災が起きたこととなります。多くの皆さんが被災地を訪問したり、ボランティアなどに参加したと思います。有難うございました。震災の記憶は日に日に薄れて行くことは仕方がないことではありますが、この岩手で学んだ経験は様々な意味で皆さんの大きな財産となるはずで、是非3月11日にはその時のことを思い出してください。そして小さくても結構です、何らかのアクションを取ることを希望します。

今後も岩手大学で学んだことを誇りとして、多様な社会の中で大いに貢献することを期待し、学長としての式辞といたします。

平成29年3月23日

国立大学法人 岩手大学長 岩渕 明